

「残したい風習」

雲龍寺 うんりゅうじ 住職 まかへ 眞壁 たいろう 太郎

私の住む地域では、葬儀を終えた後、亡くなった人の供養として行う「札打ちふだうち」という風習があります。

これは、ほうぎ伯耆地方(鳥取県西部)から出雲地方の東部に伝わる風習で、お札の真ん中に「南無地藏大菩薩」、右側に戒名、左側に俗名ぞくみょうと享年を記し、七日ごとにお寺にある六地藏や地域に点在するお地藏さまにお参りし、お札を貼って巡るといふものです。むなぬか六七日までは白い札で、なのなぬか七七日(四十九日)には、赤い札を打ち止め札とするそうです。謂いわれはいろいろありますが、四十九日の間徳を積むことで、亡くなった人の 供養をするためです。

このような風習は、地域によって様々あります。淡路島では、三十五日を迎えた時に、「団子ころがし」という風習をおこないます。これは親族が山の上に登り、山の斜面に背を向けて、丸めたおにぎりを「それ」と一斉に投げるのです。一説には、故人が三途の川を渡る際に邪魔をする鬼がいるので、この世側から顔を覚えられないよう、背を向けておにぎりを投げ、鬼がそれを食べている間に無事三途の川を渡してもらおうのだそうです。

ところで仏教では、師匠から弟子へ教えを伝えることを、「燈火」を「伝える」と書いて「伝燈」といいます。お釈迦様の教えという「燈火」が、代々のお祖師様を通じて私たちに伝わって来たように、ご先祖様は今の私達に「ご先祖様を敬う心」という大切な「燈火」を、様々な風習という形で伝えて下さったのだらうと思います。

故人が安らかにあの世に行けるよう願う想いは、いつの時代も変わりません。核家族化にコロナ禍も相まって、今後葬儀の様式も、少しずつ様変わりしていくのだと思います。そのような中においても、ご先祖様から頂いた燈火を絶やすことなく次の世代へ繋いでいくことは、大切な先祖供養につながるのではないかと思います。